

(2) 介護等体験を終えて 〈6〉

心が通じあえる喜びを感じた7日間の体験

法学部 3年 I.A

私は特別養護老人ホームでの5日間、特別支援学校での2日間の介護等体験で、大学の講義や教科書を読んだだけではわからない、たくさんのことを学ぶことができた。

私は今まで、普通の老人ホームには何度か訪れたことはあったが、今回のような特別養護老人ホームは初めてであった。予想をはるかに上回る現場の状況や厳しさに、ただ何もできずにいるだけだった。職員の方には、入所者の方々とお話ししてくださいと言われてただけで、後は何もさせてもらえなかった。入所者の方々の大半は認知症で、ほとんど会話をすることができない。会話をすることができない人が数人いても、次の日には前日話したことを全て忘れている。毎日が自己紹介、同じ内容である。3日目に、心が折れそうになった。自分は一体何のために介護等体験をしているのか、現場の職員の方に迷惑をかけているだけではないか。

そんな葛藤の中、4日目を迎えた。この日に、小さな変化が起きた。ある入所者の方に、「昨日もいたよねえ、ご苦労様」と言われた。嬉しかった。自分の存在が初めて認められた気がして、かつ初めてコミュニケーションがとれたと感じたからだ。そんな中、最終日を迎え、お世話になった入所者の方々1人ひとりに挨拶をしたところ、「寂しくなるねえ」、「また来てくださいよ」と言われ、思わず涙が出てしまった。この5日間、何度も挫けそうになりながら、たくさん話しかけたり、一緒に歌を歌ったり遊んだりしたことで、心が通じ合えることができた。この5日間で、確

実に自分の中で「何か」が変化したのを感じた。

2日間の特別支援学校では、また違った体験をさせてもらった。元気に走り回る子どもたち、そしてその子どもたちに我が子のように愛情を注いで接する先生方。私は正直子どもは苦手だったので、初めは不安で一杯だった。2日間の体験はそれぞれ運動会予行・運動会本番であったので、基本的に外にイスを出して子どもの隣に座って、子どもの相手をするのが主な役割であった。私が担当した生徒は特に症状が重い子で、1人で座らせておくわけにはいかない。私は絶えずその子のそばにいて、その子が今何を思っているのか、今嬉しいのか、楽しいのか、それとも悲しいのか、というのを言葉ではなく、表情や仕草から読み取る。もちろん初めはそううまくはいかない。しかし、その子としっかり向き合いこちらから心を開けば、なんとなくだがその子の気持ちがわかるようになってくるのだ。慣れてくると子どもも私になついてくれて、忘れかけていた人の温もりを思い出し、一緒に過ごし遊ぶことがとても楽しく感じられた。2日間の体験が終わった日、子どもは苦手だったところか、むしろ好きになっていた自分に気付いた。

7日間の体験を終えて、私は様々なことを学んだ。まず、介護の現場の厳しさだ。人手不足なのは、素人の私から見ても明らか。不景気で国からの補助金も減らされ、人件費を削るしかない。しかし、そのような苦しい状況の中でも、現場の職員の方々は、常に最善

を尽くしている。画一的で機械的な介護ではなく、1人ひとりに合わせた、人間味のある愛情がこめられた介護だ。その姿に私は心を打たれ、純粋な心を取り戻した。

また、今回の体験で「命」について改めて考えることができた。「生きる」とは何なのだろうか。子どもや老人のことについて、「誰もが来た道、誰もが行く道」と聞いたことがある。今回の体験を通して、自分なりにその答えを見つけることができ、人間的に大きく成長できたと思う。障がいをもつ子どもだからこそ、その成長の1つひとつが親にとってより嬉しいのだろう。障がい者・健常者が共に生きる「共生社会」が1日でも早く訪れることを、私は心から願う。